

飛來タルヲ前ノ如クシテ打落シツ、其時ニハ母心得ケル、早ウ此ノ猿ハ子ヲ取ラムトニハ非ザリケリ、我レニ恩ヲ酬ムトテ、驚ヲ打殺シテ我レニ得サセムト爲ル也ケリト思テ、彼ノ猿ヨ志ノ程ハ見ツ、然計ニテ只我ガ子ヲ平カニテ得サセヨト、泣々ク云ケル程ニ、同様ニシテ驚五ツ打殺シテケリ、其ノ後猿他ノ木ニ傳テ、木ヨリ下テ、子ヲ木ノ本ニ和ラ居エテ、木ニ走り登テ、身打搔テ居ケレバ、母泣々ク喜デ子ヲ抱テ、乳飲セケル程ニ、子ノ父ノ男走り喘タキテ來タリケレバ、猿ハ木ニ傳ヒテ失ニケリ、木ノ下ニ驚五ツ被_レ打落テ有ケレバ、妻夫ニ此ノコトヲ語リケルニ、夫モ何カニ奇異ク思ケム、然テ夫其ノ驚五ツガ羽尾ヲ切取テ、母ハ子ヲ抱テ、家ニ返リニケリ、然テ其ノ驚ノ尾羽ヲ賣ツ、仕ケル、恩報ズト云乍ラ、女ガ心何カニ侘シカリケム、此レヲ思フニ獸ナレドモ恩ヲ知ルコトハ、此ナム有ケル、何況ヤ心有ラム人ハ、必ズ恩ヲバ可知キ也、但シ猿ノ術コソ糸賢ケレトゾ人云ケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔古今著聞集^{魚虫十禽獸}〕越後の國に乙寺といふ寺に法花經持者の僧住て、朝夕誦しけるに、二の猿來りて經を聞けり、二三日をへて、僧こゝろみに猿に向て云やう、汝なにの故に常に來るぞ、もし經を書奉らんと思ふかといへば、二の猿掌を合て僧を頂禮まけり、あはれに不思議に思ふ程に、五六日をへて數百の猿あつまり、かうぞの皮をおふて來りて僧の前にならべおきたり、此時僧これを取て料紙にすかせてやがて經を書奉る、其間二の猿やうくくたものを持て日々に來りて僧にあたへけり、かくて第五卷に至る時、此猿見えず、あやしく思て山をめぐりてもとむるに、ある山の奥にかたはらに山のいもををきて、頭を穴の中に入れてさかさまにして二の猿死してあり、山のいもを深くほり入て、穴に落入てえあがらずして死したるなめり、僧あはれにかなしき事限りなし、其猿のかばねを埋みて念佛申て廻向して歸りぬ、其後經をばかきをへすして、寺の佛前の柱をゑりてその中に奉納してさりぬ、其後四十餘年をへて、紀躬高朝臣當國の守に